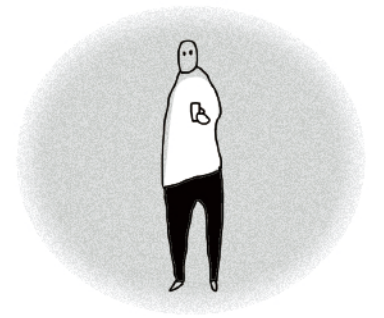


環境現像

現像。
それは、真っ黒なフィルムに色を出現させる。
電気は空間やモノに機能という名の色をあたえる。
今や電気が通う所は私たちの生活にはなくてはならないもの
となっている。
そして、依存してしまっているが故に電気がなくなった時、
私たちは途方に暮れてしまう。



（管理人）
街で暮らす路上生活者たち



帰宅困難者



電車にゆられ、イヤホンでお気に入りの曲を聴き、
スマホで天気予報を調べる。
「今日はお昼から雨か。」
駅に着き、人混みに流されながら、
そびえ立つビル群の前を重い足取りで職場へと向かう。
今日も、代り映えない日常が始まった。



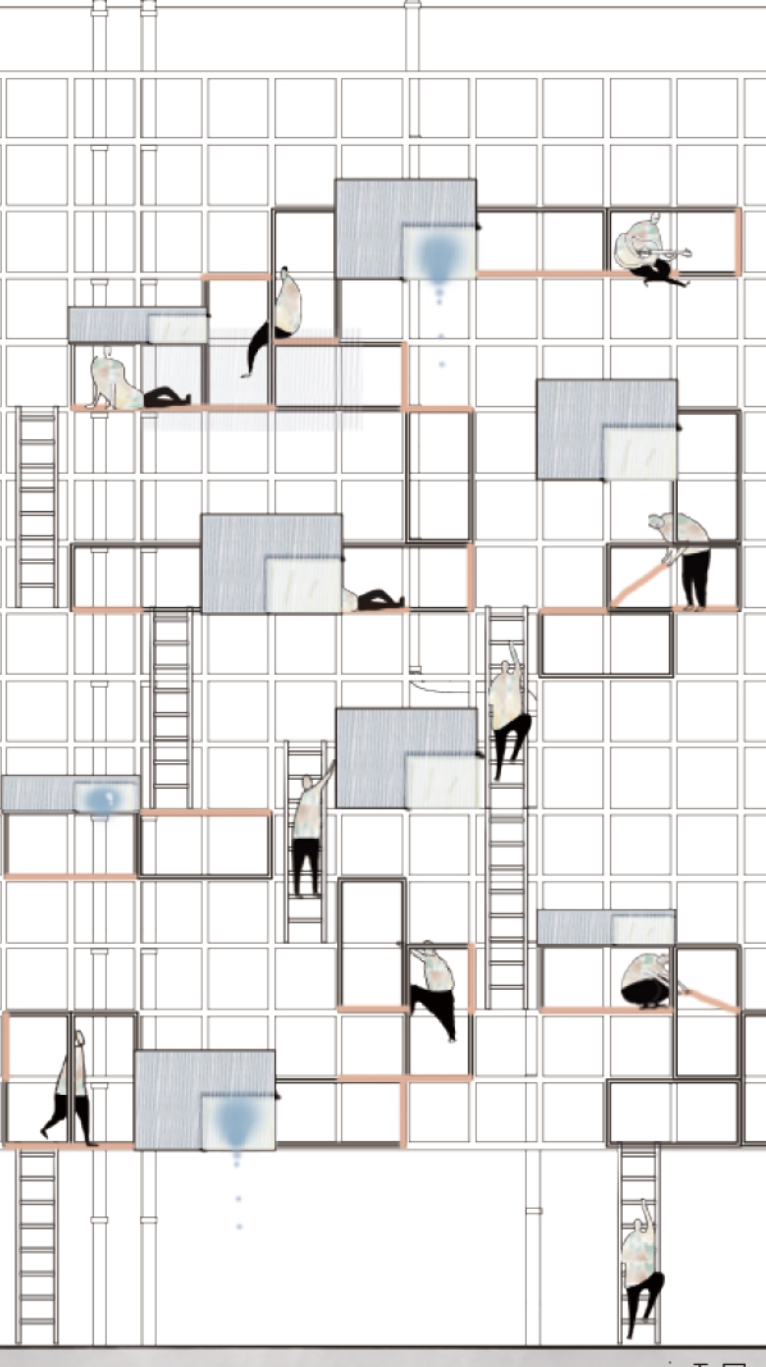
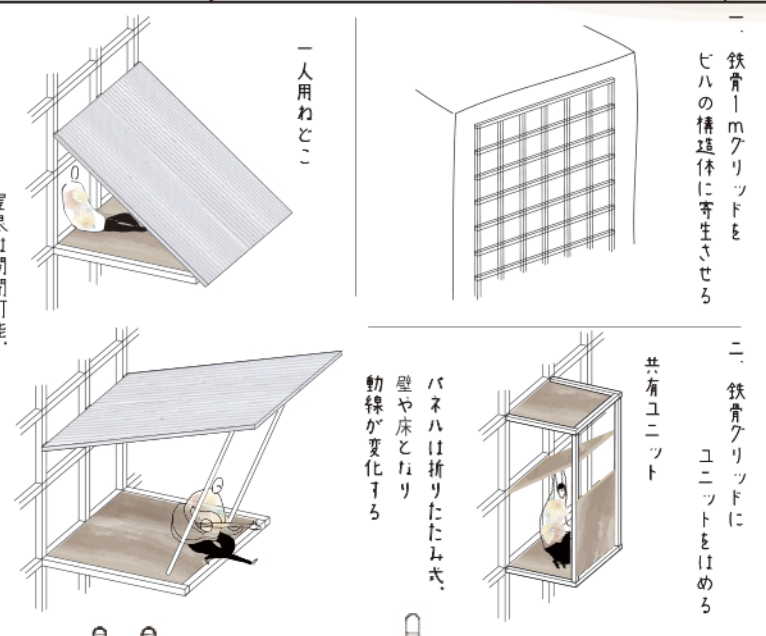
数分後...
「今日は早めに帰ってあのドラマ見ないか」
「まだかよー」
「はやく帰らせてよー」
「信号機止まってんじゃわーか」
「危ないっ」



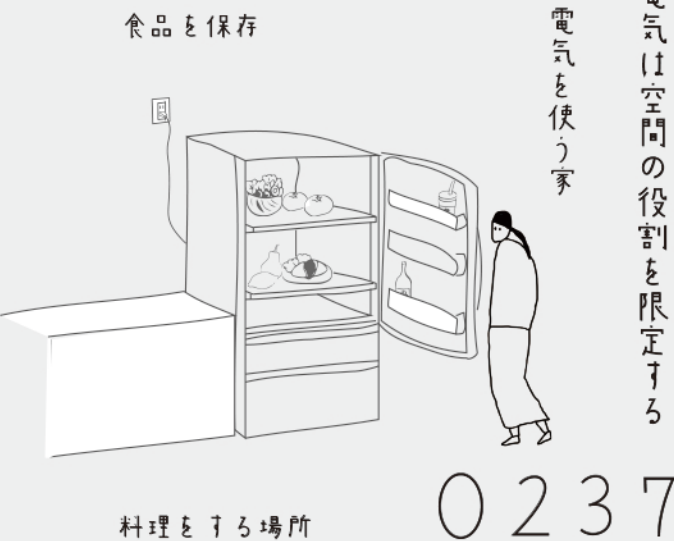
—— 彼は都市の隙間に家を結んだ。
道を行き交う足音やエンジンの音を音楽として受け取り、
そこに自らの鼻歌を重ねる。 ——

電気が使えなくなってから、街のいたるところで帰宅困難者があふれかえっている。
「あ、充電が切れる。」
頼みの綱であったスマホも使えなくなり、途方に暮れていると
どこからか鼻歌が聴こえてきた。
歌の方向に目を向けると
いつもなら気にも留めない冷たくたい路地裏のはすが、
むしろ温かくやわらかい雰囲気に包まれていた。

路上生活者たちは、私たちには見えていない空間やモノを、自分の生活場として
とらえることに成功している。日常のささいなことが起こる環境とは
異なるもう一つの環境を頭の中で作り出し、それを体感できるほどに新しい命をあたえていく。
この行為を本提案では「自分色に現像する」と定義する。
都市において伸びやかに、自らの手で「現像」を施す行為は
私たちに新しい環境のこらえ方をもちたさだろう。



立面図



食品を保存



水をためる



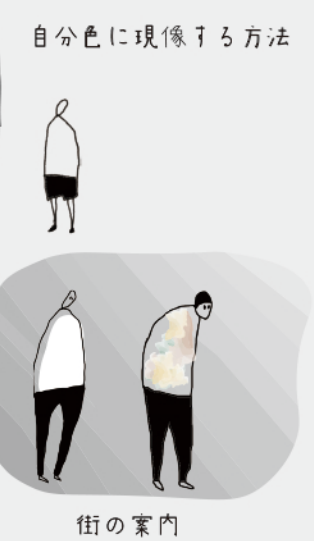
服を収納



室外機の熱風

無料のたき出し

廃棄となるパンのミミ

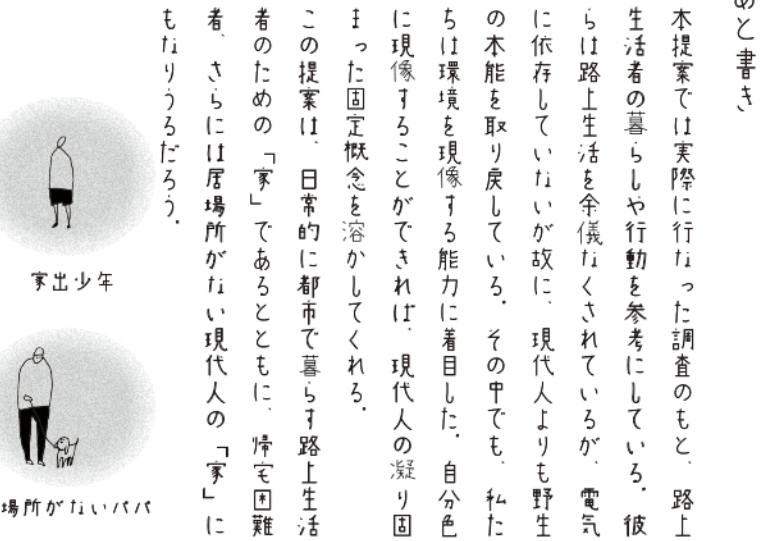


自分色に現像する方法

街の家内



野生の感による天気予報



家出少年

居場所がないババ